

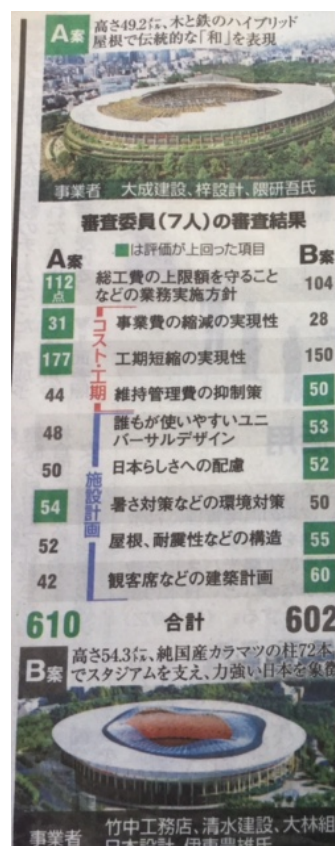
## 新国立「これにて一件落着」なのか？

2020年東京五輪・パラリンピックの主会場となる新国立競技場は、業者2チームから提案されていた設計・施工案のうち、写真のようにA案に決まった(朝日新聞12月23日朝刊)。合計点で8点差の僅差だったが、審査委員長によると「工期短縮の実現可能性でB案と差がついた」という。

新国立競技場の迷走については、このレポートで何回か取り上げてきた。そもそも現競技場(すでに解体され、空き地となっている)についての議論が不十分であり、公共事業の進め方に疑問を感じてきた。当初のザハ・ハディド案が、7月に白紙撤回され、今回の選考結果になったわけだが、「これにて一件落着」でよいのか。A案に決まったので、もう「えーあん」と言った声も聞こえてきそうだが、問題だけはきちんと指摘しておきたい。

写真下は日経新聞23日朝刊掲載の審査委員会7人による審査結果だ。ここで注目したいのが、委員1人あたりの配点である。審査委員1人あたり140点のうち「コスト・工期」関連が半分の70点を占めている。他方、デザインを含む「建築計画」への配点は10点だけ。「裏返せば、旧計画の撤回によって新国立は工期とコストの厳しい制約に縛られ20年大会の象徴、『スポーツの聖地』としてのデザインを追求し、議論する余地がほぼなくなってしまったともいえる。」

数年前、名古屋の大規模施設の「指定管理者選定」の審査に関わったことがある。そのときの「経験」からも、選考基準とりわけ委員1人あたりの配点が決定的だ。今回の新国立競技場も、「コスト・工期」の配点の高さが決め手となった。A案は工期短縮で27点上回り、施設計画の差を挽回したのである。最初から「勝敗」はついていたとも言える。配点基準などがどう決められたのか、そのプロセスを明らかにしてもらいたい。マスコミは「これにて一件落着」とせず、この間の真相を真剣に追求してもらいたい。



項目 (委員1人あたりの配点)	A案	B案	
業務の実施方針(20)	112	104	
コスト・工期	事業費の縮減(30)	31	28
	工期短縮(30)	177	150
	維持管理費抑制(10)	44	50
施設計画	ユニバーサルデザインの計画(10)	48	53
	日本らしさに配慮した計画(10)	50	52
	環境計画(10)	54	50
	構造計画(10)	52	55
	建築計画(10)	42	60
<b>7人の合計=980点満点</b>	<b>610</b>	<b>602</b>	

(注)日本スポーツ振興センターの発表をもとに作成

(2015年12月25日)